

# Jane Eyre 試論——Jane の愛をめぐる 葛藤のドラマを中心にして

大 平 栄 子

Charlotte Brontë (1816—1855) は、*Jane Eyre* (1847)において、厳しい倫理感を持ち、独立した意志と自由を求めて生きる誇り高い女性である Jane が、狂人を妻にもつ男性 Rochester と激しい恋に陥るという plot を設定し、Jane が愛を成就するために経験した内的葛藤のドラマを展開している。確かに、作者は Jane の葛藤を通して「愛」と「義務」との対立という問題を追求しているが、「愛」の障害は「義務」だけとは限らないのではないかと筆者は考える<sup>1</sup>。そもそも「義務」とは何を表わしているのか。この点について考えながら Jane の内的葛藤を構成しているものは本当は何であるのか、その葛藤はどのような形で解消されているかについて探してみたい。さらに、作者の意図した「愛」と愛を障むものとの和解の方法が成功していると言えるかという点についても検討してみたい。

*Jane Eyre* は家庭教師として住み込んだ家敷の主人である Rochester に恋をし、やがて求婚されるが、結婚式の当日になって彼に狂ってはいるがれっきとした妻がいることがわかる。Jane の葛藤が熾烈を極めるのは Rochester に妻がいるという秘密が暴露されたこの時である。Jane は「理性」の声に従って Rochester のもとを離れるべきだと自分に言いきかせるが、Rochester への思いを容易には断ち切ることができない。Rochester の止まるようにとの懇願に対し、Jane の「良心」と「理性」が愛する気持ちにおぼれ感情の罠にはまることを戒めるが、ともすれば狂気の如くわめく「感情」に Jane は揺さぶられる。このように Jane の心の中では「感情」と「理性」との「血みどろの戦

い」(p. 342)が繰り広げられ、Jane は「血管に火が駆けめぐる」(p. 344)ような状態を体験する。しかし、やがてこのような状態を、Jane は 'quite insane' (p. 344)であると判断し、精神がこのように異常ではなかった時に受けいれた「法律」「道徳」を守ろうと決意する<sup>2</sup>。一体 Jane にとって「法律」「道徳」とはどのような意味をもつものであろうか。次のように Jane は述べている。

'I care for myself. The more solitary, the more friendless, the more unsustained I am, the more I will respect myself. I will keep the law given by God ; sanctioned by man I will hold to the principles received by me when I was sane, and not mad — as I am now ....' (p. 344)

Jane の言う「道徳」「法律」とは、「神によって与えられ、人間によって認められた」ものであり、なによりも「わたしが受けいれ」その価値を信じてきたものである。注目したいのはこの最後の点、Jane が受け入れ信じてきたということと、'I care for myself .... I will respect myself' という主張との関係である。これは何を意味するか。Jane にとっては自らが信じ、守ることによって自己を支えてきた「道徳」を破ることは、神の掟や社会の道德律を無視することになるだけでなく、なによりもまず、自分自身に背くことになるということを示唆している。「自分が大事」であるからこそ、自分が信じてきた「道徳」を守るべきであるという Jane の主張は、自らが信じてきた「道徳」を破る、すなわち、「信念」を守ることができなければ人間の尊厳は損なわれると Jane が考えていることを暗示していると思われる。

また、Jane は肉体的に無気力になり、Rochester の激情の炎にのまれそうになった時、'my soul' (p. 344)「自分の魂」が失われずにいる限り、自分をささえ支配することができるというのめかしているが、それはとりもなおさず、Jane が自己の魂を喪失する程の危機に立たされていたということの意味する。その時、Jane が 'I care for myself.' (p. 344)と言い、「道徳」を守ろうと決意するわけである。従って、Jane にとって「道徳」を守ることは「自分の魂」を見失う危険を避けることに通じるとも言える。では、Jane の言う 'my soul'

とはいかなるものであろうか。

Jane は「束縛されぬ意志をもった自由な人間」(p. 282)であるという自覚をもって生きようとしてきた。自由で独立した意志をもち、人間として平等の立場に立てはじめて Rochester の 'spirit' (p. 281) にむかって話しかけることもでき、愛することもできると Jane は考えていた。しかし、Rochester の家敷を出ようという決心がつかぬまま惶悶していたこの時、Jane の心は自己の感情に強く捕われており、情念に支配され、精神の自由を失いかけていた。また、後に、この時のことをふりかえてみて Jane は自分の意志を捨てて Rochester の激しい感情の流れに身をまかせていたら「信念」を守れぬ誤ちを犯すことになったと述懐している。これらのことを考えあわせると、「自分の魂」を失わずにいるということは、自らが自らの主人であるための自由と意志の力を持ち続けることを意味する。従って、「道徳」、「法律」を守ろうと Jane が必死になる理由は、「信念」を貫ぬくことで自己の尊厳を守ることと、束縛されない意志の力によって自己を支えようとしたからである。Rochester にとっては背いたからといって誰もそこなうことのない 'a mere human law' (p. 343) であり、彼はそのような「法律」にこだわるよりも、見捨てられた者の絶望がいかに深いか考えてくれと Jane に迫るが、Jane にとってはそれは Rochester の言う「単なる人間の法律」ではない。これまでみてきたように、Jane にとって「法律」を守るか守らないかという問題は Jane 自身の肯定できる生き方に根本的に関わる問題であることがわかる。Jane の「義務」感は Rochester のもとを去るべきであると命ずるが、それは自己の尊厳を守ろうとする必死の自己主張と密接な関係にある。

Jane は Rochester の激情に対し自尊心によって最後まで抵抗し、それにうち勝つ。しかし、Jane にとって激情の炎にのまれまいとすること、それ以上に難かしいのは「悲しみ」に捕われないようにすることであった。従って、Jane は Rochester が Jane を失って絶望し、自暴自棄になり、身の破滅を招くことになりはしないかと恐れながらも 'I had dared and baffled his fury ; I must

elude his sorrow: '(p. 345) と述べているように、Rochester の悲しみを直視しそれに立ち向かうことを避けてしまうのである。このように Jane は愛する者の悲しみから目をそらすことによって自分を見失う危険を避けることができたと言える。しかし、やがて、Jane は Rochester を見捨てたことへの激しい後悔の念に捕われる。

... birds were faithful to their mates ; birds were emblems of love. What was I? In the midst of my pain of heart and frantic effort of principle, I abhorred myself. I had no solace from self-approbation : none even from self-respect. I had injured —wounded— left my master. I was hateful in my own eyes. (p. 348)

Jane は「道徳」を守ろうとした「自分を称え」ようと努めるが、慰められるどころか、逆に Rochester を傷つけ見捨てた自分を憎むことになると語っているが、この自責の念と自己嫌悪にみちた Jane のことばは次のことを示唆していると思われる。Jane が Rochester との闘いで勝利をおさめたことはすでに述べたが、それが真に自己を肯定し、誇れる自由な生き方に通じるような勝利ではないことを Jane 自身認めているということである。自己喪失の瀬戸際に立たされた Jane は、Rochester の「悲しみ」への同情を自らに禁じることによって、かろうじて自己を支えたにすぎない。

Rochester の情熱に引きずられそうになる自分を叱咤し、ついに自己の信念を守りとおした Jane ではあるが、そのために 'I must renounce love and idol.' (p. 342) と述べているように、Jane は落ちた「偶像」はもとより、「愛」もなげ捨てざるをえない。しかし、そう決心して Thornfield 館を出て間もなく、あてもなくさ迷っている時、Jane は Rochester の悲惨な生活を救いたいという思いに胸ふさがれる。次のように Jane は語っている。

I could go back and be his comforter—his pride ; his redeemer from misery, perhaps from ruin. Oh, that fear of his self- abandonment — far worse than my abandonment — how it goaded me ! (p. 348)

後悔の念と Rochester への深い同情心が相俟って、激しい感情の吐露するところとなっているが、Jane がここで、Rochester の身の破滅が 'my abandonment' よりも悪いと述べていることは注目に価する。「自分が大事」と思う心によって Rochester の苦しみから遁れてきた Jane が、Rochester を破滅から救いたいという一心から「自己放棄」も辞さないという。また、Jane は読者に送るメッセージという形で自己放棄と「愛」との関係について '.... never may you, like me, dread to be the instrument of evil to what you wholly love. (p.348) と述べている。「道徳」という鎧に身をかためていた Jane としては「愛する者のために悪の手先となることを恐れたいないように！」という過激なメッセージは、唐突で多少リアリティに欠けるきらいはあるが、ともかくも、愛する者のために自ら汚れ、罪を背負うことも辞さない、と言える程徹底した「愛」についての考え方が示されている。これは、自らを犠牲にしても愛する者を救おうとする勇気を持てなかった Jane の自責の念の裏返しでもある。

以上見てきたように、「愛」のために自尊心を捨てることも恐れないという可能性を示す Jane のことばから、Jane の「愛」についての考え方の変化を読みとることができる。しかし、依然として Jane の決心は変わらず、Rochester のもとへ戻りたいという欲求は抑圧される。

Jane が「自己放棄」(p.348)や、精神的に墮落することを極度に恐れる背景には、すでに述べた、自由で独立した意志を持つ人間をめざす、という積極的姿勢の他に、「情熱」への恐れと不信というものがあると思われる。

Jane は婚約期間、Rochester との間に「隔たり」(p.301)を保つことが真の幸福につながると考え、Rochester の感情の高まりに水をさし、愛情の表現をできる限り避け、常に冷静に対応しようと努める。なぜ、このような 'reasonable check' (p.302)をしなければ幸福になれないと Jane は考えるのか。その理由の一つは自分を見失うことへの不安である。情緒に押し流され、情熱の因になって自己を見失うことを Jane はたえず警戒している。しかし、それでも Jane は Rochester という「一人の人間」(p.302)に心を奪われ、ついには

彼を偶像化するまでになる。Rochester は Jane にとって「全世界」どころか、  
'my hope of heaven'「この世ならぬ至上の希望」(p. 302)になりつつあった。  
それ程までに Jane の感情は高まる。それ程の力をもつ「情熱」への恐れが  
Jane にはみられる。

もう一つの理由は、「情熱」というものへの不信の念である。「高まってきた  
熱情の頂から冷却の奈落」(p. 301)に落ちこむのではないかという恐れが  
Jane を捕えているが、「情熱」の移ろいやすさを Jane が強く意識しているこ  
との証左である。Jane の考えでは、「情熱」は強烈な感情ではあるが永続し  
にくいものである。従って、それは「真実の愛情」とは区別されるものである。  
Jane は Rochester の秘密を知り「偶像」が崩れ落ちた時、彼の愛が 'real  
affection'「真実の愛情」(p. 324)ではなく、'fitful passion'「一時的な激  
情」(p. 324)ではなかったかと疑い苦しむ。また、Rochester と別れた後に、  
彼のもとに留まっていた場合どのような生活になっていたかと想像をめぐらし  
ている時、Jane は次のように言う。

Which is better? — To have surrendered to temptation ; listened to passion ; .... to have been now living in France, Mr Rochester's mistress ; delirious with his love half my time — for he would — oh, yes, he would have loved me well for a while. He did love me — no one will even love me so again. (p. 386)

Rochester が「しばらくの間」は十分愛してくれるだろうという Jane のことは、  
'He did love me.' という発言同様、Rochester の愛を、湧き起こりいずれまた消  
え去る頼りにならない感情、激しくはあるが一時的な感情を主体とした、感覚的  
な愛にすぎないのではないか、という Jane の懐疑心を含んだことばである。ま  
た、誘惑に身を任せ情熱のままになった Rochester との「夢幻の樂園」的生活  
を「虚妄の悦楽」(p. 386)と Jane は言うが、社会的に認められないために  
虚妄であると考えているとも言えるが、それ以上に、移ろいやすい感情にしか  
支えられない生活、しかも、その情熱に自己のすべてをかけ、やがて情熱の衰

えと共に崩壊せざるをえない生活であるから虚妄であるという含みが強いように思う。

情熱への恐れと不信の念ゆえに、Jane は Rochester への自然に湧き起こる自分の感情を抑え、また Rochester の愛も素直に受けとめることができない。この状態は、決して自分の情念を自分で制御していると言えるものではなく、むしろ、不安によって自分の愛する心を縛りつけているという状態である。従って、Jane には自分の「愛」も Rochester の「愛」も、情熱の嵐の狂暴さによる心を奪われ、自由な心でみつめることができない。Jane は、愛する者を自らの不尊な計画によって傷つけた誤ちを認め、後悔しているという Rochester の弁明を聞き、真剣に Jane への思いを訴える Rochester の姿を見て、Rochester の「愛」が単なる「一時的な激情」にすぎないのではないかという疑いから一度は解放され、彼の中に「不変の愛情」(p.326) が満ちていることを認め、彼の誤ちを許そうとする。しかし、Jane を引きとめようとする Rochester の熱意の激しさに必死で抵抗しなければならないと考えている Jane は、Rochester が激情にかられ、Jane の意志を無視して支配しようとしていると受けとめてしまうのである。Rochester は、自分の身勝手な計画によって傷つけた相手に必死に自己の自由を守ろうとしているのを見て、Jane 中の「毅然とした、はげしい、自由なもの」を認めざるをえない。後になって、Rochester のもとへ戻った時 Jane はこの時のことを反省し次のように述べている。

I should have told him my intention. I should have confided in him : he would never have forced me to be his mistress. Violent as he had seemed in his despair, he, in truth, loved me far too well and too tenderly to constitute himself my tyrant: (p.465)

このことからわかるように、この時の Jane には Rochester の激情しかみえず、その情熱の流れにのまれてしまった者が辿る運命を一 Rochester の「mistress」になり「虚妄の悦楽」に耽溺し、後悔と恥辱にまみれる生活—としてしか描くことができない。従って、Rochester を心の底から信頼しきることができなか

ったわけである。

Rochester に妻が生存しているという秘密が明らかになり、「法律」と「道徳」に従って去るべきであると命じる自分の中の「理性」、「良心」、「意志」の声と、Rochester のもとに留まりたいと思う「感情」の対立に Jane は引き裂かれるが、「理性」の声に従って家敷を出ることになる。ここで「愛」に対立するのは「道徳」や自尊心だけではない。真実の「愛」の確信を障ることによって「愛」に対立しているのは「情熱」であり、言い換えると、「情熱」の否定的側面を軽蔑するあまり、逆にそれに巻き込まれふりまわされる、そのような状態から逃がれるために、自分の心を閉ざす Jane 自身の「情熱」への消極的姿勢である。

Rochester の悲しみを逃れることによって Jane は自己の「信念」を守り通し、自分の義務を遂行し、自己を支えることができた。一度は Thornfield に戻って、「愛」を拒絶され絶望していると思われる Rochester を慰め、救いたいと考えるが、その後も Jane の心を占めているものは「義務」の意識であり、「正しいこと」(p.444)をしようとする意欲である。それが自然に湧き起こる感情を抑えつけ押しこめてしまうのである。従って、真実の「愛」の成就の障げとなっているのは「情熱」と、「義務」という名の自尊心との対立であるとみることもできる。

しかし、Jane の自己の自然な感情を認めようとしない頑な姿勢は、St. John の「愛」と「義務」との内なる闘争に係わってゆく中で変化し、やがて Jane は心を真実の愛に向けて解放することによって諸々の葛藤から解き放される。それではまず、Jane の Rochester への燃えるような思いと「義務」との葛藤がどう展開するか、St. John の「愛」と「義務」の葛藤に対する Jane の反応を通してみたいよう。

Jane は Thornfield 館を無一文で出、放浪の末行き倒れているところを St. John という牧師に救われ、彼の家に厄介になる。Jane はうち砕かれた「偶像」と失われた楽園に対し哀惜の思いがあり平安を見出しえない。そのよ



うな Jane を St. John は「人間的な愛情や同情」(p. 382)に強く捉われていると見抜く。たそがれ時に、もの思いにふける Jane は「束の間の狂暴な刺激」(p. 386)をうち砕いたことを正しかったと思い、「道徳」と「法律」を固く守り、自由な女教師 (Jane はこの時、村の小学校の教師として働いている) として生きる自分を幸福であると思う。しかし、そう思いながら自分が思いがけず泣いていることに気づく。別れた Rochester と二度と会うことのない運命を思い、また Rochester が悲嘆にくれ自暴自棄になり、正しい道から離れ破滅に向っているのではないかと思い涙を流した Jane であるが、そう思った時 Jane は「夕暮れの美しい空」「寂しいモートンの谷間」(p. 386)から顔をそむける。この行為は、Jane が Rochester の不幸についても、自分の真実の感情についても真正面からみつめることができないことを示唆している。また、夜は Rochester の夢を見、「彼を愛し、彼に愛されて、死ぬまでそばですごしたいという願望が最初のときの強力さと熱烈さをもって新たによみがえってくる。」(p. 393)が、夢から目ざめた Jane はふるえ、おののき、絶望にわななく。Jane の夢に対する反応の意味するところは、一つには、あまりに執拗で抑えがたい「感情」のエネルギーの烈しさを新ためて思い知らされて愕然としたということであろう。「理性」が判断し命ずる生活を送ろうと決意を固めても、感情は Jane の意志とは無関係に襲いかかるものであることを Jane は自覚せざるをえない。

Jane の側には Jane とは異なる理由からではあるが自己の感情、熱情と闘っている人間がいる。St. John である。彼は Oliver 嬢を狂おしく、「初恋の激しさ」(p. 399)をこめて愛していると認めるが、一方で心の中から自然に湧き起こる「人間らしい愛情」(p. 399)を善良な目的と「自己否定の若芽」(p. 399)を腐らせてしまう「甘美な毒」(p. 399)として否定する。St. John は大きな目的を追うために「小さな人間の愛情」を忘れる、と Jane が見抜いたように、絶対的「神の愛」の観念に捕われすぎて、「絶対的愛」にまで昇華しない人間的愛情を蔑視する。St. John は彼女との生活を夢想する時に味わった、心が喜びに満ち、感覚は恍惚となった瞬間を単なる錯乱と妄想の瞬間として唾棄する。Jane

は初め、 Oliver が真実 St. John を愛していると思い、彼に結婚をすすめる。しかし、 St. John は Oliver に強く魅かれながらも、彼女が宣教師(St. John は宣教師の仕事を天職と考え、インドへ渡る計画をたてていた)の妻になりうる資質をもたず、彼の抱負に共感を抱くこともできない相手であるから妻には不適格であると考えていることを知る。 St. John は自分の感情を押し殺そうとするだけでなく、彼女の愛情をも空しく偽りのものであると決めつける。

Jane は St. John が愛を拒まれた Oliver の失望や悲しみに同情を寄せることのないのを知って冷淡だと感じるが、彼が迷い悩み苦しんでいることを見抜く。このような St. John を見守っていくうちに、一度は彼に Oliver との結婚をすすめた Jane だが、彼が到底「善良な夫」(p.418)になれないことを悟る。また、彼の「愛の性質」(p.418)をも理解する。それが「感覚的な愛」(p.418)にすぎないことを。次のように Jane は述べている。

... I comprehended all at once that he would hardly make a good husband ; that it would be a trying thing to be his wife. I understood, as by inspiration, the nature of his love for Miss Oliver ; I agreed with him that it was but a love of the senses. I comprehended how he should despise himself for the feverish influence it exercised over him ; how he should wish to stifle and destroy it ; .... (p.418)

「感覚的な愛」が熱病のような影響力をもつゆえにその愛を抹殺してしまいたい St. John が望んでいることを Jane は理解する。情念の奴隷となることを恐れるあまり、彼は次から次へと「泉のようにわき起る」(p.399) 人間らしい愛情をすべて否定する。Jane は St. John の Oliver に対する態度をみていて、彼が「義務」のみを考え人を愛することも愛されることをも拒否する、人間的愛情や人情などに少しも興味を持たない人間であることを知る。また、 St. John が「初恋の激しさをこめて」 Oliver を愛していると言っても、それは St. John のように相手の悲しみや苦しみに関心をもたず、同情することもない人間にも、いやおうなしに湧き起り心を捕えてしまう情念の軛にすぎ

ないことを Jane は悟る。それが Jane の理解した「感覺的愛」の意味するところであろう。

自分の「義務」を遂行する上で慈悲も憐れみももたない人である St. John に Jane は求婚される。ここから Jane と St. John との闘いが展開するわけであるが、この闘いは人間の愛を問題にする Jane とそれを軽視する St. John との闘いであると同時に、Jane 'の中の「愛」と「愛」を障げるものとの闘いでもある。

Oliver 嬢への「情熱」と「義務」との葛藤に苦しむ St. John を見守る中で、彼の「愛」についての考えを理解した Jane はさらにこの闘いの中で「愛」そのものについての理解を深め、と同時に自分についての認識も深めてゆく。

Jane は St. John にとって「愛」とは「偉大なる仕事」(p.399)と彼が言うものために支払われる犠牲にすぎないと、St. John の「愛」と「義務」についての考え方を理解する。Jane はそのような意識に耐えていけるかと自問するが、そのような苦難に耐えてゆくことができないばかりか、そのような殉教は不当であると断定する。さらに、Jane は St. John 'の「愛」についての考えを軽蔑すると John に向って宣言する。'I scorn the counterfeit sentiment |you offer : ' (p.433) と述べているように彼の愛情が「まがいもの」であるという判断を Jane は下す。このように断言する Jane の意識の中には、対照的に Rochester の真実の愛への確信が芽ばえていると言えよう。このように Jane の「愛」についての認識は St. John の「愛」についての考え方への Jane 'の反応の仕方によって暗示的に示されているにすぎないが、その反応が批判的、否定的方向に向って明確になるにつれ、Jane の「愛」についての認識が深まっているという印象を与える。

Jane は St. John 'の結婚の申し出を断わるが、拒否した理由は、St. John が高邁な主義と理想、義務のための道具として Jane を妻にしたがっていることを見抜き、さらに彼の「愛」を徹底的に無視した結婚観—人間的愛情がなく心が「抜け殻」(p.430)であったとしても結婚という愛の形式は神聖である—

を受け入れることができなかったからである。Jane は「夫と妻が愛しあうようには愛しあっていない」(p.431) ので結婚すべきではないと述べるが、そこからは愛するがゆえに結婚することこそ法にかなったものであるという主張が読みとれる。しかし、結婚すべきではないとの決定的理由となったのは、St. John の妻となったら、自分の「生来の熱情の火」(p.433) を閉じ込めるか、燃やすにしても内部に向って控えめに燃やすことしかできないと考えたためである。

この Jane の判断は、視点をかえてみ直してみると、Jane がここに至って自己の情熱を積極的に肯定していることを物語っていると読みとることができる。次に引用する文は、Jane が St. John の妻となることが可能かどうかを自然な「感情」という観点から検討し、彼の 'comrade' としてはともかく、妻となることは不可能であると結論づけているところである。

As his curate, his comrade, all would be right .... I should still have my unblighted self to turn to : my natural unslaved feelings with which to communicate in moments of loneliness. There would be recesses in my mind which would be only mine, to which he [St. John] never came, and sentiments growing there, fresh and sheltered, which his austerity could never blight, nor his measured warrior march trample down. But as his wife—at his side always, and always restrained, and always checked—forced to keep the fire of my nature continually low, to compel it to burn inwardly and never utter a cry, though the imprisoned flame consumed vital—this would be unendurable. ( p.433 )

「生来の捕われぬ自然の感情」であるとか、「情操の芽」あるいは、'the fire of my nature' ということばがみられるが、このことは、初めて Jane が自分の自然な感情を認めたことを示唆している。Rochester との関係の中では情熱は制御されるべきものとして捉えられていた。また、Rochester と別れた後も、たえず Jane の心を激しく揺すぶり続けた感情に耳をふさいできた Jane ではあ

るが、今、やっとその不断に働く力を認める。上にあげた文は、Jane の「本性」と「感情」との密接な関係を示唆すると同時に、感情は単に抑制し、支配すべきものではなく豊かに育くまれ、時には盛んに燃えあがることが許されるべきであると、Jane 自身認めたことを示している。このように考える時、情熱の火が「愛」を焼き尽くしてしまう障害であると考えする必要はなくなる。Jane の本性に深く関わるこの熱情の炎は St. John に踏みつけられることはあっても、生命の喜びの火へと燃え盛ることは決してない。それは Rochester の真実の愛によってこそ生かされる炎であることを Jane は後になって直観する。その時こそ、Jane の本来の自己は十分に生かされることになる。

Jane は St. John が人間的な情愛などというものに少しも心動かされることなく、「義務」のためにすべてを犠牲にできる人間であることを承知で St. John の熱のこもった説得に心動かされ、St. John との戦いを放棄し、自分の意志を捨て彼の意志の激流に身をまかせたいという誘惑に屈服しかかるが、その寸前のところで、Jane はただ「正しいこと」のみをしようと熱望し自分の行く道を示してほしいと天に訴える。その時、遥か彼方にいるはずの Rochester の呼声「Jane! Jane! Jane!」(p.444)を耳にするのである。とっさに Jane は「I am coming!」(p.445)と答え、Rochester のもとへかけつけることを決断する。これは情熱に盲目的に駆り立てられたためというのではなく、Jane 自身の「愛」の決断の行為であると解釈できる。「靈感」に似たこの瞬間は「義務」のみ考え、それに捕えられすぎていた Jane の「魂の牢舎」の扉を開き、その解放された心が愛に捧げられた瞬間と考えられる。「I am coming!」と答えた Jane は初めて「義務」の前に「愛」を問題にしたといえる。この時、Jane は少しも良心の呵責に悩まされることはない。それどころか、「わたしの魂は」「進んで正しいことをしている」という確信すらある。自らの「魂」を見失うまいとして必死に「道徳」にしがみついていた Jane は、ここに至って「義務」に縛られることなく、しかも自己を見失うことなく、それどころか、むしろ自己を豊かに主張し肯定し、解放する。Jane の魂の自由は「義務」ではなく、

真実の愛に目覚めることによって可能になる。

遙か彼方にいる Rochester の声が突然聞こえるといった超自然現象とも言えるこの瞬間を、Jane の無意識の力が Rochester の声となって彼女の意識に働きかけた瞬間であると読むことも可能であろう。Jane は「あの訪れ」が 'the external world' (p.446) からではなく「内部」からきたもののようであると述べている。Jane は自己の内なるのは暗い深みから閃めく「愛」の力の働きかけに対し、意識的に 'I am coming!' と答える。この決断によって彼女の内に捕われていた「魂」は自由になる。

Jane は常に何が「正しい道」であるのかを神に、自己に問い続けてきた。それは神にも社会にも認められる生き方という意味を含むと同時に、なによりも自分自身肯定できる生き方ということの意味する。しかし、St. John との生活において、「自分の性質」を半分押えつけねばならないような不自由さを味わった Jane は、肯定できるだけでなく自分を生かす生き方というものに目覚める。つまり、自分の「本性」が生かされる生き方を求めるようになる。この「本性」と人間の自然な感情とは Jane にあっては切り離すことのできない関係にあり、泉のように湧き起る情愛を豊かに育くむことなしには Jane の「本性」を生かすことにはならない。これまで、Jane は人間の「自然」と「理性」との相剋を体験し、その間を揺れ動き、さ迷ってきたが、今はその相剋は 'I am coming!' という高らかな「愛」の宣言の中に解消する。

真実の愛に目覚め、自分を閉じてこめていた檻の扉を開いた Jane は、迷うことなく Rochester のもとへ行こうと決断するわけであるが、この時の Jane は Rochester をとりまく環境の変化を知るわけもなく、従って、Rochester の家敷を出てきた時と全く同じ条件の下にあることを承知しながら、なお Rochester のもとへ戻ろうと決意する。しかも、「わたしの魂」は「進んで正しいことをしようとしている」(p.446)、あるいは「聖霊のすぐ間近まで進み入ったように感じる」(p.445) と言っているように Jane の決断は正当化されている印象を読者に与える。従って、この Jane の決断は、たとえ社会的に認められる形で

結びつくことで愛が報われるということを期待できないにしても、真の愛情こそ自分を生かすという高らかな宣言として読むことができる。はたして、この Jane の決断の意味が、Rochester の妻の死という運命の転換ともいえる plot の展開で変わってくるか、また、この決断によって Jane の心の中の諸々の葛藤を一瞬にして解消してしまったという印象を与えるが、その印象に変化がみられるかどうかみてみよう。

Rochester に一目でも会おうと決心して出かけた Jane ではあるが、心は揺れ動く。一目会えたらそれでよいと思う反面、会ったら夢中になり走りよる。そうしたらどうなるか、という不安をのぞかせるかと思うと、「ロチェスターの眼ざしをうけて生きる喜びを味わったとして誰が傷つくか」(p. 448—449)とも考える。このような Jane の心の迷いは 'I am coming!' と叫んだ時の決断の与える印象を弱めるだけでなく、その意味を曖昧なものにする。しかし、この Jane の不安の根は Rochester の妻の死という運命の転換という plot の操作によって簡単に引き抜かれる。「靈感」にも似た一瞬の Rochester の呼声に励まされて Thornfield に来てみると、Rochester の家敷は火事で跡かたもなく、彼の妻は亡くなり、Rochester 自身も片腕を失い、失明し、失意のうちに日を重ねていることを知る。

Jean-Pierre Petit が述べているように「ソーンフィールドの火事は都合よく狂女を片づけてくれ」であり<sup>3</sup>、Jane は神にも社会にも認められた形で愛を成就することになる。この結末に至っては 'I am coming!' の意味がかわってくる。それまでは Jane 自身の愛についての認識が深まった結果の決断であるという印象が強かったが、この決断が偶然性とも言えるような plot の展開によって正当化されてしまい、そのことによって、かえって見えざる運命の力による恩寵というニュアンスがでてくることで、Jane の「愛」についての認識の深化によって諸々の葛藤から解放された啓示の瞬間と考えられた場面の意義をそこね、これまで追求してきた問題の焦点がぼやけてくることになる。 'I am coming!' という Jane の返事は Rochester の呼声に対して意識的になされた

ものと考えられたがその意味あいが弱められる。また、Rochester の声は Jane の愛の認識の深さを表わす象徴的場面というよりは、超自然の介入という運命的色彩を強める。妻は死に、Rochester の罪が火事によって浄化され、一人わびしく生きているこの時こそ、あらゆる誘惑に屈せず苦難の道を歩んだ Jane に、Rochester のもとへ行くがよいという神の導きの声が聞こえたという印象に変わってくる。従って、試練によってきたえられた、何ものも障げることのできない純粹で強い愛、しかも「魂」を解放する愛、の勝利によって「愛」にまつわる葛藤に終止符をつけたと思われたものが、そうではなく、最終的には Rochester の妻の死によって社会的制度の制約が消え、二人が結婚によって結ばれることによって、その葛藤は解消される。従って、Rochester の妻が火事によって死亡するという運命の転換によって、Rochester の呼声が聞こえるという決定的瞬間になされた Jane の「愛」の決断にみられた勝利感は薄れ、「義務」あるいは社会に認められる形としての「愛」という色合いが濃くなる。

Jane は愛の挫折という体験を通して自己認識を深め、無力で未成熟な愛を豊かにしてきたわけであるが、その間 Jane の中で闘われてきた葛藤が究極的には何によって和解されたと言えるのか不明瞭にならざるをえない。従って、Jane の内的闘いのドラマが徹底して追求されていないという印象を残す。

この原因が、作者 Charlotte Brontë 自身の厳しい倫理感と情熱についての考え方との統合がうまくいかなかったことによるものかについての考察は次の機会に譲るとしても、Leslie Stephen が述べているように、'consistency of doctrine,' 'harmony of design' が欠如しているために、相反するものの和解、統一に失敗している<sup>4</sup>という印象はぬぐい去れないように思われるのである。

#### 注

- 1 Mrs Humphry Ward は、*Jane Eyre*, Hawarth Edition, 1899 の序文の中で  
'... in the interest of some strange social instinct which she knows a 'duty,



which she cannot explain and can only obey, tramples her love under foot...」  
と述べていることからわかるように、愛の成就の障害となっているものとして、「義務」をあげている。事実、作者自身、主人公に「わたしは愛を問題にせず義務だけを考えていた。」(p. 444)と言わせていることからわかるように、「愛」に対立するものとして「義務」を設定していることは明らかであるが、しかし、作者が意図しているかどうかは別として、「義務」以外に「愛」を障むものがあるという解釈を可能にしている部分がこの作品にはあると考える。

2. Charlotte Bronte, *Jane Eyre*, Penguin, Reprinted, 1983. なお、本書よりの引用については本文中に引用頁を記す。
3. Jean—Pierre Petit, 'Charlotte Brontë — *Jane Eyre*' in *Le roman anglais au XIX<sup>e</sup> siècle*, Presses Universitaires de France, 1978.『十九世紀のイギリス小説』小池滋・白田昭訳(南雲堂, 1986) 146 頁。
4. Leslie Stephen on Charlotte Brontë, in *The Brontës: The Critical Heritage*, ed. by Miriam Allott, Routledge & Kegan Paul, 1974, p.422.